
時間 トキ を越え

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間 トキ を越え

【Nコード】

N8639Y

【作者名】

M3

【あらすじ】

初代ボンゴレと十代ボンゴレ……ボンゴレリング“縦の時空軸の奇跡”が再び……！

序章（前書き）

初めて、初代ボンゴレを書いてみます（ - - ; ）

ご感想・ご意見頂ければ笑

あえて設定をいうならば、原作+アニメ-至門編といったところで
す。なのでボンゴレV Gはないです！・初代と十代達は顔見知り
です！

小説『ボンゴレ？世の決意』の完全続編でよろしいかと……

では、お楽しみ下さいませ（ - - ; ）

序章

並盛町、この地を陰となり陽となり支えている組織がある。

“ボンゴレファミリー”

このボンゴレファミリーボスを務めているのが、沢田綱吉。通称ツナ。優柔不断で小心者の彼は、中学時代こそ“ダメツナ”という愛称で冴えない日々を歩んでいた。

しかし、そんな彼に1人の世界最強のヒットマン（殺し屋）が現れる。

呪われし赤ん坊、アルコバレーノのリボーン

彼は、いきなり家庭教師として現れるや否や、沢田綱吉に“ボンゴレ次期10代目候補”なのだと言ひ、彼を立派なマフィアのボスとするため、特訓の日々を強いた……

そして沢田綱吉には…ボンゴレとしての、
大きな戦いの日々が待ち構えた……

マフィア反逆者六道骸率いる黒曜中との戦い

ボンゴレ直属特別暗殺部隊”ヴァリアー“とのボンゴレリング争奪戦

10年後の未来の世界、並盛とボンゴレの未来をかけた死闘、ミル
フィオーレとの戦い

あれから、短くも長い月日がながれた……現在の沢田綱吉は、マ
ファイア最強・ボンゴレファミリーのボス「ボンゴレ」だ。代々
受け継がれしボンゴレリングと、“未来の戦い”で出会った大切な
戦友であり、戦力のアニマルリング。今の沢田綱吉率いるボンゴレ
ファミリーは、この2つのリングを守護し、時に糧として、自分達
の町を守っている。

忘れてならないのが、沢田綱吉と共に数々の試練を乗り越えてきた
ボンゴレリングの守護者達だ。守護者は、ボンゴレリングを有する
6人の幹部を指す。必ずしもボンゴレファミリーに所属していなけ
ればならないという縛りはないが、ファミリーに危機が訪れた時に
は必ず6人の守護者が集められ、どんな困難でも乗り越えると言わ
れている。

ボスの沢田綱吉の持つ大空を筆頭に、嵐・雨・雲・晴・雷・霧と天
候になぞらえた7つのリングがあり、掟に基づいて代々ボンゴレフ
アマリリーボスとその守護者6人が所持してきた。

嵐の守護者 獄寺隼人。荒々しく吹き荒れる疾風、常に攻撃の核と
なり、休むことのない怒濤の嵐となるのが使命だ。彼は沢田綱吉の

右腕として恐れられている。

雨の守護者 山本武。

全てを洗い流す恵みの村雨、戦いを清算し、流れた血を洗い流す鎮魂歌の雨となることが彼の使命。ボンゴレ2大剣豪の1人と謳われている。

雲の守護者 雲雀恭弥。何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリィを守護する孤高の浮雲となること。これが彼の使命だ。雲雀はボンゴレ最強の守護者とも言われている。

晴の守護者 笹川了平。使命は、ファミリィを襲う逆境を自らの肉体で碎き、明るく照らす日輪となること。綱吉や獄寺・山本より1つ先輩だ。

雷の守護者 ランボ。

激しい一撃を秘めた雷電、雷電となるだけでなく、ファミリィへのダメージを一手に引き受け、消し去る避雷針となることが使命である。ランボは幼い子供だが、その実力は小さな身体に秘められまだ

まだそこ計り知れない…

霧の守護者 六道骸。

無いものを在るものとし、在るものを無いものとすることで敵を惑わし、ファミリアの実態をつかませない…まやかしの幻影となることを使命とする。かつては対立関係にあった骸。だが、“大空”は、すべてを包み込む存在でなくてはならない。沢田綱吉には…その度量があり、そんな沢田綱吉だからこそ、六道骸も、実態の掴めない幻影としていられる。

これが、ボンゴレ？世率いるボンゴレファミリアである。まだ若い
が、その実力はボンゴレ創設者達、初代ボンゴレファミリアとひけ
とらないだろう。その十代ボンゴレファミリアの姿に、マフィア界
では

“初代ボンゴレファミリアの再来”

と謳われ始めている……

序章（後書き）

気がつけば…銀魂と青の被魔師の同時進行になった!!!(。 。 ;)
やべえ!投稿やべー……

九代目より

海はその広がりには限りをしらず

貝は代を重ねその姿受け継ぎ

虹は時折現れはかなく消える

リングに刻まれし我らの時間

תנ"ך

ספר

「……フリー……モ……」

「おい。ツナ」

「……ん……」

……

「起きろツナ！」

「っ？！……いつてえ〜！！」

「いつまで寝てやがんだツナ。仕事しろ」

「リポーン……いきなり蹴ることないだろ？！」

「いつまでも机でふて寝してやがるからだ」

「十代目、風邪を引かれます。お休みになられるならそろそろお帰りになされたほうが…」

「大丈夫だよ。獄寺くん……起こしてくれて良かったのに…」

「正式にボンゴレボスになってからまだ日が浅いですから……慣れない仕事にお疲れかと」

「う・うん……まさかまだ学生の俺達にまで仕事回してくるなんて……」

「あたりめーだ。学生だろうがなんだろうが……お前はもうマフィアのボスなんだ。自覚しやがれ」

「だから……俺はマフィアのためにボスになった覚えはないっていつも言ってるだろ」

「ツナ!! いるか?」

「?! 山本!」

「なんかよ。いまランニングから帰ってきたんだけど、校門にずけー怪しい人達立っててさ、声かけたらこんなにくれたぜ?!」

「声かけんなよ……手紙?」

「Jの印……」

「十代目、これ九代目からの手紙ですよ。」

「ん？そつなのか？んじゃ…さっきのボンゴレの人達か！」

「もう……高校まで来ないで欲しいよなあ〜目立っちゃっよ」

現在、ボンゴレ？世とその守護者達の拠点は、並盛にある。本来ならば、正式にボンゴレを継承されたところで、イタリア本部へ行くところだが…ツナや守護者達の希望により、ボンゴレ日本支部という形で、並盛で活動を行っている。

とはいえ…ツナ達はやっと並盛高校に上がったばかりで、もちろんアジトも存在しない。そこで、高校の会議室の1つを内密に拝借し、ボンゴレアジトとしてやっている……。裏で手回したのは何故か

雲雀らしい……ツナ達は改めて、雲雀が並盛の何なのかが気になったところだ。

「ツナ。手紙にはなんて書いてあるんだ？」

「えっと……え?!ボ……ボンゴレ?世とその守護者は今週末……イ、イタリア本部に来るように”……”だって……」

「え?!」

「急……っすね……十代目」

「ホントだよ……学校……」

「大丈夫だぜ、ツナ。今週末は創立記念日挟むから連休だ」

「そっか…なら、よかつ…いや良くないよ！みんなに知らせなきゃー！」

「九代目のことだ。たぶん雲雀や骸には直接手紙渡してると思うぞ。来るかどうか保証出来ねーけどな」

「リポーン…他人事みたいに言うなよ！…ん…大丈夫かな…あの2人」

「先輩には、俺が伝えるぜ ツナ」

「ありがとう。山本」

「大丈夫つすよ。十代目、骸はなんだかんだ…声かければちゃんと顔出しますし…雲雀は雲雀で後から個人的に来てるんで」

「う・うん……」

「んじゃ俺、ランニング戻るな！ツナ」

「ありがとう。山本！」

「にしても…急になんすかね？九代目…」

「ホントだよ…イタリア本部は、俺達の留守の間はヴァリアーに頼んでたはずだけど……」

「まさかあいつら…俺達の居ない間にっ！」

「XANXUSに限って…ないと思っけど…」

ヴァリアーより

+++++ボンゴレイタリア本部

「うっ おおい！！ボスはどこだああ！！」

デカい声のポリウムとともに部屋に入ってきたねは、スペルビ・スクアーロ。ヴァリアーの特攻隊長であり、山本の剣の師匠でもある。

部屋の中にはその他、ベルフェゴール、ルツスーリア、レヴィ・ア・タン、アルコバレーノのマーモンがいた。

「シッシッシッ！ボスなら今風呂だぜ」

「何いい?!」

「あらスクアール、どうかしたの?」

「悠長に構えてる暇はねえぞお！沢田達が帰ってくんだよ!!」

「」「?」「」

「しげしげ……まじっ」

「ちょっと早く言ってよー!!」

「ボスの準備をしなくては！」

「あの六道骸がくるのかい?.....ボス.....」

「騒がしいぞ...カス共が...」

「ボツ、ボスウ!!ふ、服をオオ!!」

「シシシシ！黙れよ変態。ボス、あのボンゴレ十代目が帰ってきてくん
だつてよ。」

「……………」

「どおすんだあ？！ボス」

「カスが……………迎えてやれ……………手厚くな……………」

「……………了解……………」

本部へ

ツナ率いる十代ボンゴレファミリーは、イタリアにあるボンゴレ本部に到着した…。とはいっても、雲雀恭弥と六道骸は別行動。沢田綱吉・獄寺隼人・山本武・笹川了平・ランボだけで先に上陸する者たちになった。

「お帰りなさいませ!?!世」

「お帰りをお待ちしておりました!」

「長旅ご苦労様です!」

「守護者の皆様もお疲れ様です！」

「ボス！お帰りなさいませ！」

ボンゴレ本部に仕える部下達の丁寧な出迎えに、ツナはいまだに慣れないところがあった…

「ははは…俺達…日本で特になんにもやってないんだけどな…ツナ」

「ホントだよ…どうにもまだ違和感が…」

「... 田代十」

「「「「...?」」」」」

シュツッ! ! !

「え?!」

「下がれ! 沢田!」

「ツナ!」

獄寺達がツナからかばったのは…飛んできたナイフだった…

「シシシシ！さすがに継承しただけあって…少しは成長してるじゃん？！」

「…………ベルフェゴール…てめえ」

「チャオ！まあ…ガキの時に比べたらイイ面構えになったじゃん
獄寺隼人…」

「っ！」

「まあまあ獄寺、ツナに怪我がなくて良かったじゃねーか」

「相変わらず甘えヤローだぁ…山本」

「スクアーロ！久しぶりだな！」

「まったく…甘ちゃんがぁ」

「あら〜 笹川了平じゃないの〜」

「おう！極限に元気にしてたか？ルツスーリア！」

「なんだ…六道骸はいないのかい？」

「残念だったなバイパー…骸の奴は後から合流する」

「何度言えば分かるんだ。僕はマーモンだ」

「.....」

「.....XANXUS.....」

「.....」

「ひ、久しぶり……本部の監視……どうもありがとつ」

「てめえんとこの雲の守護者がいきなり来やがった……なんのつもりだ」

『雲雀さんが？……先に到着してたんだ』

「えっと……実は九代目から、守護者全員本部に集まるよう手紙が届いたんだ……だから……」

「……行くぞ……カス共……」

「バイビ」

「沢田あ…事が全て終わったら連絡入れろお」

「うん。ありがとう、スクアーロ」

「雲雀が先に来てたんだな！」

「みんな…本部に入ったからには、各自一回部屋に戻って指定ス
ツに着替え、会議室に来て」

「了解しました。十代目」

「OK！」

「すぐ行く、沢田」

「ランボは、俺の部屋において。俺が着替えさせてやるから」

「はーい ランボさん！スーツ着ちゃうもんね かつこいいもんね
」

「じゃ…約15分後くらいに会議室へお願いします」

「了解」

守護者集合

ツナとリボーン・ランボは会議室に向かっていた。

ツナは代々ボンゴレボスに受け継がれしボンゴレ？世のマントを羽織り、ランボは雷の守護者と分かりやすく、グリーンシャツを身に付けスーツ姿に着替えた。一方のリボーンはいつもの同じのスーツだ。

ガチャ

「?!あれ」

「……やあ」

「雲雀さん！」

先に部屋に入っていたのは、雲雀恭弥。十代目雲の守護者である。雲雀も、雲の守護者と分かりやすいようにヴァイオレットのシャツに身を包んでいる

「チャオツス 久しぶりだな。雲雀」

「元気だったかい？…赤ん坊。」

「雲雀さん……先に本部に到着してたんですね」

「六道骸と一緒に本部入りするのは嫌だったからね……」

ガチャ

「お待たせしました。十代目」

「なんだ。もういたのか雲雀」

「極限に早いな」

「君達が遅いんだよ」

レッドのシャツの獄寺、ブルーの山本、イエローの笹川と…各自属
性の色のシャツに着替えゾクゾクと会議室に入ってきた。

「十代目、残るは骸だけです。」

「うーん……リボン。どうしよう」

「いつ来るかわかんねーからな。先に話しちまえ」

「そ・そうだね……さっき、全員の本部入りの報告も兼ねて、九代
目に電話入れたら……」

主旨

「さつき、九代目に俺達の本部入りも兼ねて連絡したら……頼み事をされたんだ」

「頼み事っすか？十代目」

獄寺だけでなく、各自先の話が気になるようだ。

「う、うん。俺も初めて聞いたんだけど…ボンゴレでは、新しい代に変わること、ボスをはじめ各守護者も、肖像画として写真を1人1人撮るみたいなんだよね……」

「『え・』」

「いやだ」

雲雀だけでなく…みなあまりノリ気ではないらしい…

「ツナ……いくらなんでも…さすがにそれはちょっと、恥ずかしい
ぜ」

「うむ…極限に俺達死んでしまったみたいではないか！」

「それはいうな」

「だ…だよね…。でも、先代から…通ってる道…らしい…」

「帰る」

「雲雀……！」

「お前だけ逃げる気かぁー！！」

「我慢しろ！俺達だって恥ずかしいっ！」

「ちよつと……離してよ……」

「やっぱりこうなったな。ツナ」

「はあ……リボンも、長く九代目と付き合ってるんだから知ってたはずだよな……」

「ああ。まあな」

「言えよ!……」

「お前等もグチグチ言ってるねーで、とつととパシヤリと撮って日本帰ればいいじゃねーか」

「……」
「……」
「小僧……」

「完全に他人事っすね……リボンさん……」

「うむ……だが一理ある!並盛に飾るなら遠慮したいが、イタリアの

本部なら俺達はほとんど顔も出さんし、あってもなくても同じなのではないか？」

「くだらない…僕は帰るよ」

「その写真撮影だかな…全て終わると世にも珍しい、面白いものが見れるらしいぞ。」

「」「」「？」「」「」

「ワオ…僕を退屈させないものかい？赤ん坊…」

「ああ。保証するぞ。雲雀」

「イイネ…じゃー」は、そっちの一興に乗らせてもらっつよ」

「ひ、雲雀さん……」

「あいつあれでいいのかよ……」

「あはは！意外と単純なのな 雲雀」

「極限に褒美に弱いな……」

クフフフ……随分面白い話をしているじゃありませんか

「「「「?!」「」」」

「骸!」

「……………ふん。」

「お久しぶりです。沢田綱吉」

「あ、うん。久しぶり…クロームは元気?」

「そんなことより先ほどの話……………僕も乗らせて頂きます」

「え?!写真の話?」

「意外だな。骸」

「クフフ…なぜです？アルコバレーノ」

「マフィア嫌いのお前がマフィアの肖像になる写真撮影をするなんて思わなかったぞ」

「クフフフ…この僕だって本来なら御免被りたい所ですがね……愚かなマフィアボンゴレの軌跡をこの目で拝見しておくのも面白いかと。」

「…しょうがね…雲雀に骸が乗る気なんじゃ、俺達がやらねー訳には行かねーよな」

「十代目がやるんでしたら、俺は勿論やります。」

「ランボさん！パシャパシャ写真い〜ぱい撮るもんね」

「ランボ、俺達は撮る側じゃなく撮られる側だ」

「ブー。つまんないのー」

「えっと……わ、分かりました。じゃ決まったところで……とりあ
えず、肖像写真が飾られる場所まで行きましょつか」

「えっ？！ちょっと、リボーン」

「この扉の先は、ボンゴレボスとその守護者のみが入れる場所だ…
…あくまでヒットマンの俺は入れねえ。」

「はあ………わかったよ……みんな、いい？」

全員頷くと、ツナは、扉の取っ手に手をかけ扉を開けた

ギイ………

「すっげー!」

「極限に感無量だな!」

山本や笹川が驚くのも無理はない。

中に入ると横幅も奥行きも広く、上には、巨大な眩いシャンデリア。横の壁には、ボンゴレ? 世代をスタートとして、? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 世代の各守護者たちの肖像写真、そしてレッドカーペットの真つ直ぐ進んだ一番奥には、組織を支えてきたボスの写真が飾つてある。中でも……イタリア自警団として確立した『初代ボンゴレファミリー』の写真が最も大きく、最もその存在感を漂わせていた……

「写真いーばいだもんね!」

「十代目、さすがに…これは…」

「うん…圧巻だね…」

「クフフ…目が眩しいですよ」

「……………」

「ホントすげーな 見てみるよ獄寺、各守護者ずつ写真が分かれてんな」

「ああ…中央の大空を核として、時計回りに嵐・雨・雲・晴・雷・霧の順番か…」

「うむ…やはり写真を撮るのが極限に恥ずかしくなってきたな」

「お、俺もだぜ」

「情けねえな…男に二言はなしだ」

「わかってるって！」

「……どうしました？十代目」

「……うん。なんか……まじまじとボンゴレ？世を見た気がするな
あつて。」

「ああ、確かにな！」

「ボックスを開けるための継承時は、極限に時間が短かったからな」

ツナや獄寺たちは、いつの間にか…各初代の肖像写真の前にいた…

獄寺隼人は、初代嵐の守護者『G』

山本武は、初代雨の守護者『朝利雨月』

笹川了平は初代晴の守護者『ナツクル』

雲雀恭弥は初代雲の守護者『アラウディ』

ランボは初代雷の守護者『ランポウ』

六道骸は初代霧の守護者『D・スピード』

ツナがそう思ったのと同時に、皆のリングから、それぞれの属性の色が溢れ出す

「なっ！リングが！」

「熱いぜー！」

「……………」の感じ……」

「百蘭戦の時と同じだぞ！」

「ぐびゅ？…！」

「何ですか？これは、沢田綱吉……………?!」

ツナの全身を、オレンジの炎が包み込んでいる…

「なっ！！何これ！」

「十代目！！！」

「ツナ！」

「沢田！」

「?!みんな！」

ツナ同様、獄寺には赤、山本には青、了平には黄、雲雀は紫、ラン
ボは緑、骸は紺の炎が身体を纏ってしまっている

「ツッナッ!!!!」

ボッ!!

「「「「?!!」」」」

「お、おい…ランボが消えたぞ?!」

「極限にどつなってる!」

「ランボー!」

「くっ」

「む、骸!」

「っ！」

「おい！雲雀！」

「雲雀——！！！」

「そんな、雲雀さん！！！」

ランポに続き、骸、雲雀までも炎に飲まれ姿を消してしまった

「山本!!」

「ツナ!!」

「お兄さん!!」

「先輩!!」

「うっ…おっ?!」

「ツナ！訳わかんねーけど、逃げるー！」

「山本ー！」

「そん……山本まで……？！ー！獄寺くん！」

「十代目ー！」

「消えないで！獄寺くん！！」

「十代目っ」

ポッ！！

「獄っ……………みんな……………？なんで……………」

貝は代を重ねその姿を受け継ぐ

「?!?!」

リングに刻まれし我らの時間

「ツナは...」

ツナの床に浮かび上がったのは、ボンゴレの紋章……ツナはそれを見たのと同時に、守護者たち同様炎に包まれ姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639y/>

時間 トキ を越え

2011年12月1日01時55分発行